

# 奈良公園植栽計画について

関谷 安里紗<sup>1</sup>

<sup>1</sup>奈良県 地域デザイン推進局 奈良公園室 (〒630-8501奈良県奈良市登大路町30)。

奈良公園は、長い歴史や多様な自然が重なり、他に類を見ない植栽景観を形成しているが、近年様々な課題が生じている。これらに対応するため、奈良公園のあるべき姿を検討し(≒植栽計画)、順次整備を行っている。名勝であり複数の要素が絡むが故の検討の難しさもあるが、専門家や関係機関との協議・連携の元事業を進めている所である。事業の全体概要と、自身が関わった個別計画・整備の成果を報告する。

キーワード 植栽, 景観, 公園, 名勝

## 1. 奈良公園植栽の歴史

奈良公園は、奈良市中心部に位置する、広さ約511haの都市公園である(図-1)。この地域一帯は、奈良時代より人々の憩いの場、社寺参詣に伴う観光地となっていた。その関わりの中で、マツやサクラ等が植栽され、広大なエリアに多様な生態系が作られてきた。明治13年に公園として開設してからは、当初からある樹木を保護しつつ、新たな樹木を加える植栽整備が行われた。大正11年には、「史蹟名勝天然記念物保存法」(後の「文化財保護法」)により名勝指定(文化財の1つで優れた風致景観)を受けている。公園内に生息するシカの影響も大きく、2m程度で葉が切り揃えられた樹木と芝地により、見通しの良い景観となっている。このように奈良公園は、

歴史的・自然的・公園的な要素が重なり、他に類を見ない植栽景観が作り上げられている(図-2)。

## 2. 事業実施の経緯

2011年に、奈良公園の将来像や、維持管理・活用・運営方針を定めた「名勝奈良公園保存管理・活用計画」を策定した。その折、奈良公園の植栽について、以下のような課題が生じていることが分かった。病虫害などによる生育不良でマツやサクラが衰退すること、シカが食べない数少ない外来種であるナンキンハゼが大繁茂することによって生態系へ悪影響を及ぼすこと(図-3)、生長した樹

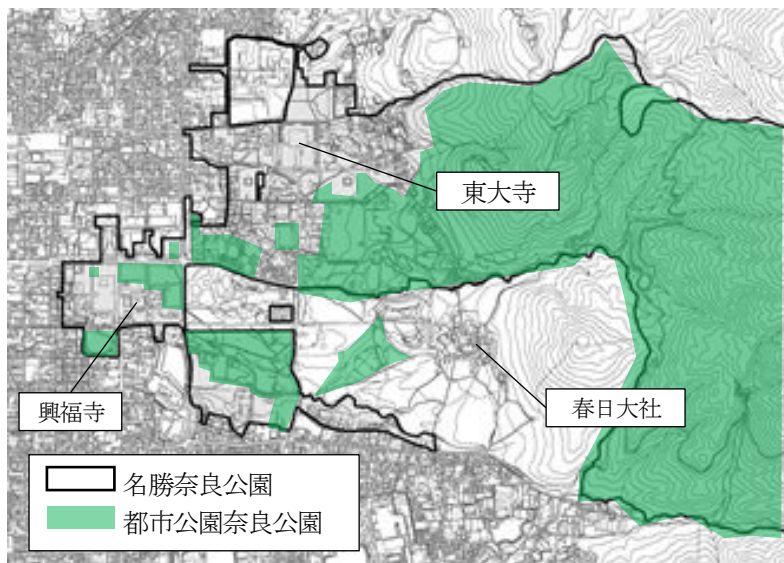


図-1 奈良公園(平坦部)



図-2 猿沢池南側から興福寺を臨む



図-3 生長力が強く在来種を脅かすナンキンハゼ

木が景観を遮り、これまで保存・継承されてきた良好な景観が損なわれていることなどである。

このような背景から、奈良公園らしい植栽景観を整理・検討し、生態系や重要樹木を適切に保存しながら、公園利用の魅力を高めることを目的に、県が主体となって奈良公園の植栽事業を始めた。2012年度、造園・景観・文化財庭園等の第一人者の専門家を委員に迎え「奈良公園植栽計画検討委員会」を設置。周辺社寺や県・市の関係部局とも連携を行いながら、順次計画を策定し、整備を進めている。

本論文では、事業概要、及び担当として2019年度から取り組んでいる計画や整備の成果を報告する。

### 3. 植栽整備の進め方

#### (1) 公園全体としての考え方

委員会では、まず本事業について、①植物の適切な育成を行う、②歴史・文化・自然・景観的に重要な樹木を保全する、③代表的な眺望を保全する、④公園の魅力を引き出す、という4段階の基本方針を決定した。次に、公園全体の特徴を把握するため、地形や樹種構成、植栽の目的・機能などを整理し8つのゾーンに大区分した(図4)。なお、このゾーン分けには、名勝の範囲内であり、公園の景観に重要な影響を与える周辺地域も対象に含まれている。奈良公園は広大で、一度に計画を立てることは困難なため、ゾーン分けをベースに、順次区域ごとに詳細な計画を定めている。

#### (2) 各区域の進め方

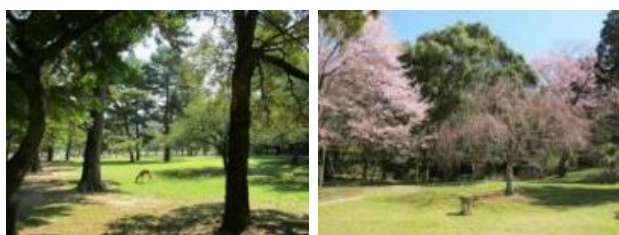


図4 ゾーン分けの一部

左: クロマツ疎林ゾーン 右: 芝地・花木林ゾーン



図5 浮見堂 左: 通常時 右: なら燈花会実施時



図6 昭和初期の絵葉書

各区域の事業を行うにあたっては、まず、適正な樹木管理や植栽計画への活用を目的として、樹木の種類、大きさ、本数、位置、状態などをまとめた樹木管理台帳を作成している。次に、計画地の植栽・景観の特性を分析し、奈良公園の植栽のあるべき姿や理想像を示す植栽計画を、次いで、当面実施すべき整備内容についてまとめる実施計画を作成している。これらの計画は、委員会で審議の上策定している。その後、実施設計を行い、整備に着手している。植物は再度生長することもあり、委員会で現地確認や振り返りを行いながら、これらの行程を繰り返し蓄積し、100年~200年かけて理想の姿を実現するため、段階的に整備を行っている。

### 4. 浅茅ヶ原・荒池園地 計画策定

#### (1) 植栽計画

浅茅ヶ原・荒池園地は、春日大社の参道に隣接し、大きな影響を受けている。一方、明治以降に、公園の魅力創出としてサクラやウメが植栽され、景観スポットでもある鷺池・浮見堂が作られたエリアもある(図5)。

計画策定にあたって、まず、区域の中でここは保全すべき・改善が必要といった評価を行った。全ての場所に言えることだが、「花を沢山植えて綺麗な景色にする」という単純な計画ではない。長い歴史の中での植栽・場所の特性の変遷を分析し、その場所にふさわしい樹種・在り方・価値を検討する必要がある。また、かつて「1本枯れたら5本植える」方針だった時期もあるようだが、それらの樹木が過密な状態で生長し、鬱閉した空間になったり、日照不足でサクラやウメが衰退したりしている。そのため「保全のための伐採」も必要となった。植栽が一体となって作り出す景観の検討については、現地調査による見え方の確認に加え、古写真等を参考に目指すべき景観を検討した(図6)。

植栽と景観の分析を元に、浅茅ヶ原・荒池園地内を2つのエリアに整理した。園地北側は、参道林としての性格が強い歴史のある区域であり、現状は樹木が良好に生長しているが、樹木の少子高齢化が進んでいるため、将来を見据えた整備が必要な区域とした。一方、園地南側

は、公園となってから造成され、花木類が多く植栽されてきた区域である。サクラ(弱い品種)や、寿命が数十年のウメなどについて、現在大きなメンテナンスの時期が来ており、生育・景観両方について改善が必要な場所とした(図-7)。

(2) 実施計画

植栽計画が100~200年後の公園の姿を見据えた計画であるのに対し、実施計画は、植栽計画を元に作られる、今後5~10年間の整備計画になる。植栽計画で描いた理想を現実的な手段に落とし込むため、特に下記について検討・工夫を行った。

a) ウメの生育不良の改善

当エリアの東側には「片岡梅林」があり、春先には来訪者を楽しませているが、全体的に生育が悪い。これまでの植栽スパンより、この場所のウメの寿命は60年くらいと考えられることから、植替整備を視野に入れているが、単純に植えただけでは同じ結果になる。そのため委員会より、原因を解明するよう指摘があった。しかし、生育不良は複合的な原因だと推察され、原因の固定化は逆に悪手という結論になった。そのため、予算や手間が軽い方法から、先行的に数本整備を行い、改善状況を確認することとなった(図-8)。

b) 樹木の多齢林化

当エリアの北側の参道林は、シカが後継樹を食べるため、樹木の極端な高齢化が進んでいた。ある時期に一斉

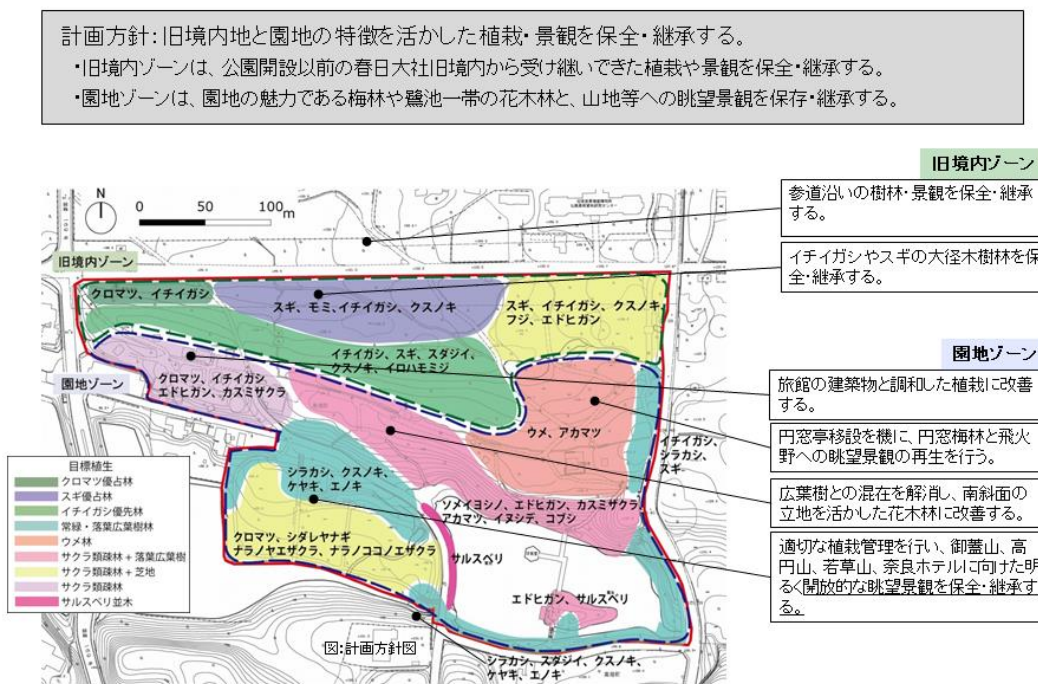


図-7 計画方針・目標植生

表: 梅林の生育環境の課題と改善策

課題	配植による対策	土壌改良等による対策	施工や管理による対策	
土壌硬度の不良	全域	・改良材混入による締め固まり防止 ・改良材混入時の攪拌による軟化 ・十分な改良範囲確保		
シカの踏圧等による表層硬化		踏圧を分散する資材を地表近くに布設		
過密による過剪定		植替時に樹木間隔を十分確保する	・一時的な剪定中止 ・剪定の位置、時期や頻度の見直し	
養分不足		・有機質の改良材の使用 ・緩効性肥料の使用	必要に応じ追肥の頻度・量の見直し (現状は2年に1回程度)	
地下水位が高い	低地付近	低地付近の植栽を減らす	・排水性の高い改良材の使用 ・植穴底面に排水層を設置	
人の踏圧による表層硬化	眺望点付近	立入多い部分への植栽を避ける	・締め固まり抑制する改良材の混入 ・(シカ踏圧対策に同じ)	
表層に客土無し	円窓亭跡地など		植栽位置決定後、その位置の土壌を確認して仕様を検討する	
車両の転圧	進入地点		重機等使用時の養生の徹底	

図-8 梅林の生育環境の課題と改善案

に植栽されているため、将来的に一気に枯れる、倒れる可能性があり、間隔も密にもなっている。そのため、段階的に植栽を進めて樹齢をばらけさせることを目的に、今回の実施計画では最低限間伐する方針になった。但し、通常、実施計画で整備する樹木をほぼ確定させるが、計画から整備まで予算上数年開く場合もある中で、この区域の樹木は、長寿命が期待できない病気が広がりつつあり、整備時に状況が変わっている可能性が高いことが分かった。そこで、整備の直前に、将来性があるかという項目も盛り込んだ独自の樹木診断（危険度診断）を行い、伐採木を判断することになった。計画で方向性を固めつつ、整備時は柔軟に対応できる方法とした。

## 5. 浮雲園地・猿沢池 植栽整備

計画策定と並行して、今年度は、東大寺参道の東側に位置する浮雲園地と、興福寺南側に位置する猿沢池について、植栽整備を行う予定である。

### (1) 浮雲園地

この整備では、100本近くの外来種ナンキンハゼを伐採する。ナンキンハゼは、昭和初期に街路樹として導入された。通常、樹木の芽はシカに食べられるが、ナンキンハゼは嫌って食べないため、競合相手のいないナンキンハゼが、短期間で驚異的に広がっている（図-9）。ナンキンハゼは生命力が非常に強く、高さ30cm程度で根まで引き抜くことが困難になる。根が残る限り刈っても永久的に再生し続け、他の樹種を淘汰し、公園内の生態系が崩れる危険がある。現在は、県、周辺地域の管理者、市民団体等によって定期的に小さなナンキンハゼの引き抜き、刈り取りを行うことで拡大を最小限に抑えているが、年々負担も予算も増えている。そのため、種を飛ばす成木を伐採し、公園開設以前より公園の景観を作ってきた、マツやサクラの植栽を行う所である。

整備にあたって、現在は文化財保存法に基づく現状変更申請等、土地の規制をクリアするための手続きを行っ

ている。「危険木でなければ、木を1本伐るだけでも国の許可がある」「掘削したら『続日本紀』に記載のある遺構が出てくる可能性も否定できない」という場所で、何とか事業を進められるよう、関係課と調整を行っている所である。

また、整備地はナンキンハゼは紅葉の美しさを親しまれてきた背景もある。公園の自然を壊す、単純に外来種だから伐採を行うのではなく、植栽の歴史と生態系に与える影響力の強さについて調査・検討を重ねた上での整備であることを正しく理解してもらうため、事業の大きな流れまで踏まえた広報を進める予定である。

### (2) 猿沢池

この場所は、池の南側から興福寺を臨む景観について、絵葉書に取り上げられるなど、昔から親しまれてきた。名勝指定時の景観を参考に、今年度、サクラの植栽と、興福寺五重塔を隠しているマツの剪定を行う。今回の整備で一気に理想の姿まで整備を行う訳ではないが、今後も随時整備を行い、最終的に、マツとサクラによる景観とすることを目標としている（図-10）。

## 6. おわりに

本事業は今年度で10年を迎え、整備が実施できそうな場所について、一通り計画を立ててきた見通しが立ってきた所である。当初は手探りで事業を進めており、ここ数年である程度実施手順が確立したと聞いた。植物は絶えず生長するものであり、整備後の、通常の維持管理から一歩踏み込んだ景観の維持管理なども含め、ある意味事業に終わりはないと言える。素晴らしい景観を保存・継承できるよう、また、効果的に事業を進めていけるよう、今後も努めていきたい。

**謝辞：**奈良公園植栽計画検討委員会の委員の皆様、周辺社寺や県・市の関係部局のご担当者様

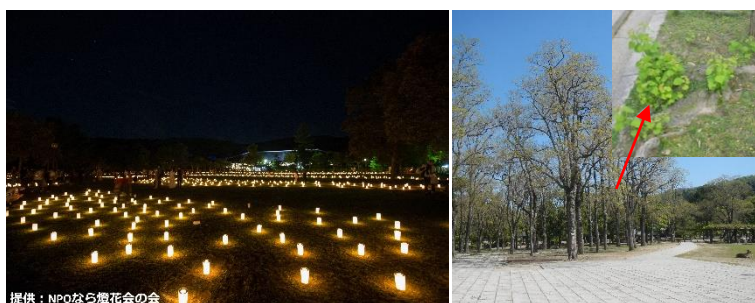


図-9 浮雲園地 左：なら燈花会実施時  
右：通常時（ナンキンハゼ林）



図-10 猿沢池の景観 上：現況 下：目標景観